

福井支部ニュース

2025年度 第9号

日本科学者会議福井支部

連絡先: 山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆報告 2025年度 JSA 福井支部第7回幹事会の概要 (山根 清志)
- ◆書評 『原発回帰を考える』日本ペンクラブ編 (小野 一)
- ◆土竜時評 「戦争」までも対象に「世界のカジノ化」を進める米政権、べったりの高市政権、ベトナムは「竹外交」(土竜 百聞)

[報告] 2025年度 JSA 福井支部第7回幹事会の概要

2026年5月4日(月)のみどりの日、定刻より少し遅れて18:03から、オンライン方式で定例の第7回幹事会が開催された。山本事務局長の司会で、予め送られていた議題にしたがって議事がすすめられた。

1. JSA北陸地区シンポジウム2026 in 富山、についての報告

「廃棄処分場を巡って」を主題として、2026/4/26(日)13:30~16:50、富山県民会館611号室を会場に、対面およびオンラインで開催。

- ・参加者は、対面が28名、Zoom接続情報によって32名、計60名。
- ・YouTube配信は「限定公開」 <https://youtu.be/JCQ11Fij92w>
- ・各報告の要旨

杉本裕明氏(ジャーナリスト)は、処分場の歴史的経緯と制度的問題を整理し、排出者責任・製造者責任の不明確さや行政対応の遅れを指摘した。

奥川光治氏は、庄川水源における産廃処分場計画について、水源保全や災害リスクの観点から問題点を示し、建設の不適切性を訴えた。

新木順子氏は、輪島市の処分場計画の経緯と震災後の状況を報告し、地域社会への影響を明らかにした。

山本雅彦氏は、敦賀市の不法投棄事件を例に、違法埋め立てや行政対応の限界、監視体制の課題を指摘した。

これらを通じて、制度・環境・地域の各側面から課題が浮き彫りとなった。

2. 例会について……積み残しなどの例会の具体化

(1)樋口英明元裁判官の映画「原発をとめた裁判長」(小原浩靖監督)、(2)島崎邦彦氏の著書『3.11 大津波の対策を邪魔した男たち』については進展なし。

(3)「学問の自由とゆらぐ基盤」(JJS2025年9月号特集論文)などを参考に、福井支部内で学習会(例会)を実施した。

2026/4/19(日)13:30~16:00、福井県教育センター3F会議室において、伊藤勇幹事の司会で、森透代表幹事による開会の挨拶後、山根清志幹事(福井大学名誉教授)が「我が国における「学問の自由」と「大学の自治」について」と題して講演を行った。(YouTube配信は「限定公開」、編集中)
<<講演概要>>

「学問の自由」と「大学の自治」の基本概念を確認した上で、大学が国際化、規制緩和、競争原理、選択、多様化、自己責任などの政策原理にもとづく改革の波にさらされることになる1990年代以降の政府主導による大学改革の策動の流れを概観した。とくに設置基準の大綱化や国立大学法人化、近年の国際卓越研究大学法により、国家統制の強化や「学問の自由」と「大学の自治」の政府による形骸化ないし「葬り去り」が進んでいる現状が指摘された。

質疑では初等中等教育における統制強化の実態も報告され、問題の広がり共有された。本例会は、「学問の自由」と「大学の自治」をめぐる現状への理解を深める機会となった。

3. 第26回総合学術研究集会(26総学)についての案内

・主催: 日本科学者会議

開催日: 2026/9/5(土)~9/27(日)

9/5(土)および6(日)は岡山大学にて対面(ハイブリッド)開催

9/7(月)以降は、オンライン開催のみ

- ・現在、分科会設置申し込み受付中(1st サークラー)
- ・原問研は「B3 脱原発への課題と展望」9/6(日) 9:30~12:00 で開催。
(原問研:委員長・山本雅彦、副委員長・前田定孝)

4. 『福井の科学者』特集号の件について

高木秀男編集長から、現在までの色々の悩ましい状況が語られた。これまでのところ、6編の原稿が寄せられているが、其の中の3編は1~2頁もの、そのほかの長いものは1本で10頁を超えようというものもある。また、テンプレートを用いたものとそうでないものとでバラバラ。原稿の中には、10枚以上の写真が掲載され、或いは写真1枚の大きさがとても大きなものを含んでいて、頁の二段組みと一段組とが交じり合う形でやっていくのか、はっきり言って判断ができかねる。原稿締切りは5月末、発行目標は7月ということになっているが、恐らく発行は遅れることになるだろうとのこと。これに対し、編集委員予定の幹事のひとりからは、同人誌のようなものであれば頁が一段組と二段組とで入り交じっているのがあっても許されるのかもしれないが、学術誌の場合にあっては不自然であって許容しかねる等の意見が出された。体裁の統一・不統一の問題は、今後も暫く尾を引きそうに思われる。

5. JSA 第57回定期大会(オンライン開催)についての案内

第1日目:2026年5月30日(土)10時から17時

第2日目:2026年6月14日(日)10時から17時

- ・支部からの大会代議員については、5月24日の支部総会で決定する。
正代議員(未定)、補欠代議員(未定)
- ・定期大会議案に対する意見について
小野一幹事から意見の提案があったが、本日欠席のため、検討せず。

6. JSA 福井支部第56回総会の日程と議案書(案)について

- ・総会の日程:5月24日(日)13:30~(12:00にシャッターが開く)
会場:福井県教育センター3F
- ・分担起草して成った総会議案書(案)につき、逐一チェックした。議論の中

で、幹事会開催を隔月から毎月にするのを総会に提案することになった。

7. 支部ニュースについて

- ・小倉幹事の尽力で、支部ニュース8号が発行された。

8. 会員拡大と会計について

- ・伊藤担当幹事から、第55期(2025年度)決算報告と第56期(2026年度)予算案の報告があった。また、会費滞納が今年は増えたとの付言があった。

9. 「人権擁護委員会準備会」による3つの規定等、の案内

第57回定期大会において議論し、承認することになる規定等の案は、以下の三つである。

1. 日本科学者会議ハラスメント防止人権宣言(案)
2. 日本科学者会議におけるハラスメント対策等に関する規定(案)
3. 日本科学者会議におけるハラスメント対策等に関する規定細則(案)

その他(イベント紹介)は省略。幹事会は20:03に終了。参加幹事は7名。

(山根 清志)

JSA福井支部第56回総会が開催されます
2026/5/24(日)13:30~ 福井県教育センター3階会議室
オンライン参加も可能。接続情報は支部メールで案内します。

【書評】 『原発回帰を考える 3.11から15年目の大転換』

日本ペンクラブ編、集英社新書、2026/2/16

東日本大震災と福島第一原発事故から15年のタイミングで、日本ペンクラブは標題の書物を刊行した。時宜に適った企画というよりも、あれだけの大災害を経験した日本が再び原発推進路線を鮮明にする中、良識ある言論人なら絶対にやらねばならなかったことである。本書を手にする読者も、その声に応え、原子力政策の現在と未来を今いちど考え直す一助としたい。個性溢れる12人のライターが寄稿。福島原発事故翌年に同クラブが実施したチオルノービリ(チェルノブイリ)視察の紀行文も2編収録される。

原発回帰を明示的に打ち出したのは2025年2月に閣議決定された第7次エネルギー基本計画だが、予兆は前々年のGX（グリーン・トランスフォーメーション）脱炭素電源法にも現れていた。何が問題なのかは、第3章「原子力政策の合理性を問う」（鈴木達治郎）を見られたい。原発報道の環境が厳しさを増す中（国境なき記者団の発表する報道の自由度ランキングで日本は2025年には66位まで低下）、信念を貫くジャーナリスト青木美希と金平茂紀の文章は必読。この種の編著では、タイトルの付け方は苦勞の種である。スペース上の制約は理解できるが、それでも「忘却」はキーワードとして入れてほしかった。第4章「忘却に抗って書く／「負の記録」を伝えるために」（朽木祥）は、本書の出版意図そのものだから。

第8章を執筆した落合恵子の言葉が印象的である。「この思いは今も、というより、今だから余計、忘れてはならないとわたしはわたしに語り続けます。わたしたちが、「忘れさせる装置」に無意識のうちに従った時、その流れ

の中に引き込まれた時、原発への待望論はより大手を振って歩き始めます。そして、「忘れさせる装置」はわたしたちの内側の無意識の「忘れていく装置」とひとつになって、より増長するはずです」（166～167頁）。忘れることは、生きるため、心の平安を保つため必要な場合もある。だが、忘れてはならぬこと、忘却圧力に抗わねばならぬこともある。第10章「隠蔽とねつ造の歴史」で金平は言う。「原子力にまつわる出来事取材し、その歴史的事実を探っていくと、あったことがなかったことにされること、及び、なかったことがあったことにされるこ

とが横溢している」（209頁）。その行き着く先に何があるのか。権力者に都合の悪い真実が消されるだけでなく、消された記憶に上書きされた新しい事実が、知らぬ間に私たちを危険な方向へ導くかもしれない。原発事故で「誰かの、家族丸ごとの、人生・暮らしが更地にされ」た浜通り地区に設立された福島国際研究教育機構（F-REI）の問題性については、第1章「復興暴力／浜通りの研究開発と「経済安全保障」」（吉田千亜）に詳しい。

原発問題を論じる際に不可欠の視点のひとつは、それが核兵器製造から派生した技術であり、単なる環境・エネルギー政策上のテーマではなく、軍事面と一体性を持つことである。広島・長崎に投下された原爆の不条理さ、凄惨さは、風化させることなく語り継がねばならない。だが、（軍事目的であれ「平和」利用であれ）放射線被ばくの犠牲者は、世界中にいる。原子力開発における植民地主義や先住民への構造的差別など、弱者の犠牲は本書の随所で紹介される。重大原発事故を含む世界各地の問題状況を見聞した吉岡忍は、第9章で、福島の現状について次のように言う。「原発事故はあらゆるものをノラにした。・・・たしかに“お国”はルーツを語り、力を誇示して国民を鼓舞し、団結させる。思えば戦後数十年、明るい未来のエネルギー・原発も、その重要な結集軸、人々を引き寄せる力となった。しかし、一人ひとりをノラ化するのもその国家、国家の失策である。住民たちの語りは、その求心力と遠心力のあいだで揺れ動いた村と人々の肉声を伝えている」（194～196頁）。

誰もが抱く究極の問い、なぜ日本は原発をやめられないのか。「原子カムラ」として知られる政官財（「学」を加える人もいる）の癒着体制のゆえか。だがそれだけでは十分でない。第11章「忘却の果てに」（ドリアン助川）に収録された詩は、原発事故や放射線の脅威に翻弄されながらも、日常の忙しさの中でつい目を背けがちな私たちの生活態度をやや皮肉交じりに問い直す。本書は書店の話題書コーナーに平積みされたが、それもせいぜい数週間のこと。出版はビジネス、本は商品なのだから致し方ない。問題は、それが過ぎ去った後の長い時間、今ここで声を上げねばとの執筆者の思いを私たちがどう受け止めるかである。福島原発事故はまだ終わっていない。

（小野 一）



【土竜時評】「戦争」までも対象に「世界のカジノ化」を進める米政権、
べったりの高市政権 ベトナムは「竹外交」を軸に GDP 大幅増加！
報道からからみるジャーナリズム時評（その 11）

新年早々にトランプ政権はベネズエラに軍事作戦を仕掛けマドゥロ大統領夫妻を米国に拉致した。この戦争を対象にした巨額の「賭け」サイトがあり、作戦に参加した米軍特殊部隊の米兵自身が作戦実施の発表前に賭けに参加し 40 万ドル(!)を得た（戦争が賭けの対象!）ことで、インサイダー取引罪で逮捕された¹⁾。映像では、トランプ氏が取材に「賭けは知らなかった」「世界はカジノ化している」と驚く風もなくコメントしたのは、驚いた。2/28 に米・イスラエルが、オマーンの仲介で協議中だったイランの全土を、同盟国にも米議会にすら事前通告せずに、空爆したが、この時にもハメネイ氏「排除」について莫大な「賭け」があったという。この賭けサイト Polymarket は、仮想通貨による世界レベルの金融市場の取引を対象としていて、トランプ氏の息子がアドバイザーに就任、出資もしているという。BBC は「複数の金融市場における取引量のデータを調査し、市場を大きく動かしたいいくつかのトランプ氏の発言と照合し、SNS への投稿やメディアへの公表がされるほんの数時間前、ときには数分前に、取引量が急増する、という一貫したパターンが見られた」と報道していた²⁾。マドゥロ氏拉致でもそうだが、これ以降の米・イスラエルの連日のイラン攻撃でも、トランプ氏の発言や SNS 投稿の少し前から原油相場が大きく動いたりしたという。取引が匿名で行われるのでインサイダーかどうか不明とのことだが、「戦争」にも「賭け」する人が米政権廻りにうろろしているということではないか。2024 年の大統領選でも活発に動いていた、というサンケイの記事もある³⁾（選挙に「干渉」していたかも？）。

これらは現トランプ政権のかなり異質な「アメリカ・ファースト」による「普通の行動」の一例に過ぎない気がするが、日本の高市政権が「台湾有事」発言をそのままに、訪米してトランプ氏に「抱きつき」「踊る」姿は呆れるばかりだ。評者は5月3日憲法の日、アオッサ8階の県民ホールで開催された猿田佐世氏の講演会に参加した。猿田氏の講演は大変熱がこもった内容だったが、講演の最後の方で紹介されたベトナムの「竹外交（バンブー・ディプロ

マシー）」には驚いた。ベトナムは、仏軍、日本軍などに侵略され、第2次大戦後には米軍がトンキン湾事件をでっち上げて壊滅的な北爆を行ったが、最後には南北ベトナムを統一して独立を守った。そして「竹外交」路線を採る。「根を深く」「幹は固く」「枝はしなやか」にすべての国と外交を持つが、軍事同盟は結ばず基地も置かせない、小国ならでは、大国に伍すためのしたたかな外交路線だ。ベトナムはこの外交路線で経済発展を目指し、GDP の世界順位もこの20年で5～60位から34位に上げたとのことだ。翻って、日本は、ベトナムよりはるかに経済「大国」だが米国べったりの「外交」の下で、辺野古を含め米軍駐留費や基地・軍装備費など軍事費の拡大が急ピッチで進む。高市氏は経済の拡大・強靱化を声高に言うが、実質は無く円安頼みの縮小傾向だ。GDP は、かつては米国に次いで2位だったが中国に抜かれ、最近ではドイツにも抜かれ、インドにも抜かれそうだという。「竹」でなくてもせめて「柳」外交（何？）を・・・。

（土竜 百聞）

- 1) BBC <https://www.bbc.com/japanese/articles/c1eqxyldnwo>
米司法省：マドゥロ氏の失脚に賭けて 40 万ドル超の利益 拘束作戦に関与の米特殊部隊兵を起訴
- 2) BBC <https://www.bbc.com/japanese/articles/c78lg3ld920o>
トランプ政権に影を落とす数々のインサイダー取引疑惑
- 3) サンケイ https://www.sankei.com/article/20241105-RCIB5XWIZZGWRDEAVSSQ7UOP2I/?outputType=theme_uspe
世論調査と乖離 トランプ氏勝率約 60%を示す賭けサイト「ポリマーケット」

＜編集後記＞

2025 年度支部ニュース第 9 号をお届けします。

イスラエル・米国のイラン攻撃が始まってもう 3 ヶ月目、朝令暮改のトランプ SNS ではいつ終るのか全く見通せません。高市政権は、石油の備蓄放出・米露からの輸入増を言うだけで、的を外した外交で外遊です。このままでは、もし中東情勢が決着し落ち着いても、日本経済は復活しそうもないのでは、と危惧します。

（OG）

